

IUEP Geidai 2023: Arts Mapping in London

大学の世界展開力強化事業

～インド太平洋地域等との大学間交流形成支援～

Shared Campus (国際共創キャンパス) を活用した

日英豪印SDGs×ARTs グローバルリーダー養成プログラム

——世界を幸福にするイノベーション創出

東京藝術大学



IUEP Geidai 2023: Arts Mapping in London

大学の世界展開力強化事業

～インド太平洋地域等との大学間交流形成支援～

Shared Campus (国際共創キャンパス) を活用した
日英豪印SDGs×ARTs グローバルリーダー養成プログラム
——世界を幸福にするイノベーション創出

東京藝術大学



IUEP Geidai 2023: Arts Mapping in London

IUEP Geidai 2023: Arts Mapping in London	06
毛利嘉孝	
開かれた実験性 —— CSMでのワークショップ	08
中野 哲	
A Flaneur in London Contemporary Art	10
李 静文	
ポストコロナ時代のフォトグラフィック・アート	12
金 秋雨	
ロンドンのインディペンデント音楽シーンとDIY	14
宮坂遼太郎	
展示空間のなかに配置された仮設空間への考察： ロンドンで観た若手作家によるインスタレーション・アートについて	16
中島里佳	
クィア、物語、中空のグリッド	18
長尾優希	
インクルーシブな空間の現在形 —— コーヒーハウスから独立系書店へ	20
堀江 幹	
ロンドンを回遊する	22
尾上朝香	
ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ・セミナー：デジタル文化ユニット・セミナー	24
毛利嘉孝	
21世紀の心理地理学：ロンドン・フィールド調査を通して大学の未来を考える	26
清水知子	
Arts Mapping in London 2023 Photos	28

ロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ (CSM)
ワークショップ



IUEP Geidai 2023: Arts Mapping in London

毛利嘉孝

IUEP Geidai 2023: Arts Mapping in Londonは、東京藝術大学とともに Shared Campus (国際共創キャンパス)に参加しているロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ (CSM)とのワークショップを中心に、ロンドンの街をそれぞれの学生がテーマを決めてフィールドワークしたものです。

大学院国際芸術創造研究科 (GA) のリサーチ領域に所属する二人の教員、毛利嘉孝と清水知子、助手の中野哲が日本側のコーディネーターとなり、CSMのアカデミック・プログラムを統括しているポール・ヘイウッド氏、パフォーマンス・プログラムのディレクターを務めるフレッド・メラー氏の協力を得て、REBELという教育ツールキットを用いたワークショップを行う一方で、参加した院生、学部生には、8日間のフィールドワークを渡英前にそれぞれ計画させ、それぞれのテーマと計画に沿ってフィールドワークを行いました。

日本から参加した学生は7名。博士課程2名、修士課程3名、学部生2名です。博士課程の2名はGAアートプロデュース専攻のリサーチ領域とキュレーション領域に所属する学生で、修士課程の院生はいずれもリサーチ領域。学部生は音楽学部音楽環境創造科の学生です。これに、現在CSMのMA課程、ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジのPhD課程とMA課程に留学しているGAの院生3名、出身の 아일랜드 に一時帰国しているGAの研究生1名が加わり、藝大からは総勢11名が参加しました。

Arts Mappingは、ロンドンという都市を歩くことによって、都市を身体で知覚し、自分の身体感覚を変容させることを目指しています。その時のきっかけになるのが文化や芸術です。特に視覚や聴覚を用いた芸術的な体験は、一人部屋にこもって本を読むのとは異なった知識を生み出します。とりわけ、コロナ禍によって移動が制限されてしまっていたので、この3年はこ

うした身体的な知覚や知識を維持し、発展させることがむずかしい時期を過ごさざるをえませんでした。今回参加した学生たちもこの3年間は、基本的にオンラインでの研究を余儀なくされました。このロンドン研修は、本当に久しぶりの身体を使った活動でした。

現在のロンドンの街は、他のグローバル・シティ同様にメディアによって侵食されています。いたるところに大型の映像スクリーンが設置され、人々はiPhoneなどスマートフォンの画面を見ながら歩いています。カフェで仕事をするひとはラップトップのパソコンにせつせと文字を打ち込んでいます。こうした人々のネットワークは今では世界の至る所に繋がっているようです。

この時代に都市を歩くこと、都市をフィールドワークするということは何を意味するのでしょうか。特にコロナ禍の時にはゴーストタウン化した都市に活気が戻りつつある今、ポストコロナのグローバル都市を観察し、そこで繰り広げられるさまざまな文化や芸術を見ることは、きっと次の新しい創造活動に繋がっていくにちがひありません。この報告書は、そうした試みの瑞々しい記録として読むことができるでしょう。

東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科
アートプロデュース専攻
教授
毛利嘉孝

2023年3月



ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジで講演を行う毛利嘉孝教授

*本プロジェクトは、東京藝術大学の「大学の世界展開力強化事業～インド太平洋地域等との大学間交流形成支援～Shared Campus (国際共創キャンパス) を活用した日英豪印 SDGs × ARTs グローバルリーダー養成プログラム -世界を幸福にするイノベーション創出」(日本学術振興会2022年-2026年)の一部として行われました。

開かれた実験場 —— CSM でのワークショップ

中野 哲

東京からロンドンへ、パーソナリティも表現スタイルも大きく異なる10名の学生・教員が集まり、フィールドワークの旅へと出発した。今回の日程の多くは各々の個人研究に費やされたが、3月8日（水）の朝は全員揃って、みぞれが降りしきる厳しい寒さのなかを目的地へと赴いたのだった。

英国最大規模のアートスクールとして知られる、ロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ（Central Saint Martins; 以下CSM）のメインキャンパスは、ロンドン北部カムデン自治区のキングス・クロス駅付近に位置している。この一帯はかつて高い犯罪率でも知られた地域だが、21世紀に入ってからは、長期にわたり莫大な予算規模での再開発が行われてきた。大企業や教育機関も多数誘致され、今ではロンドンでも屈指のお洒落エリアへと様変わりしている。2011年からCSMのキャンパスとなった「グラナリー・ビルディング」は穀物倉庫をリノベーションしたもので、新たなショップやレストラン、ギャラリーが今もなお増え続ける街のど真ん中に場所を構える。

CSMに到着すると、アカデミック・プログラム学部長のPaul Haywood先生、パフォーマンス・プログラム・ディレクターを務めるFred Meller先生による案内のもと、まずはキャンパス内部の見学を行った。CSMのエントランスはショッピングモールに隣接しており、仰々しさは一切なしに、ごく自然な形で周囲の街並みに溶け込んでいる。そして大学の中へ足を踏み入れると、そこにはまた別の小さな“街”が出現する。

その名もずばり“ザ・ストリート”と名付けられたキャンパスのメインエリアは、屋内に造られた擬似的な街とも呼ぶべき空間である。吹き抜けの広場を囲う4つのフロアに、ファインアート、ファッション、デザイン、パフォーマンスなど多岐にわたるコースの教室やスタジオが連なる。広場に面したそれぞれの部屋は大きなガラス窓で囲われ、どんな作業が行われているのかが一目瞭然となっている。また、至るところに交流スペースのようなラウンジが用意されており、それぞれの領域の学生が互いに刺激を与え合いながら、オープンに交流できることを目指して設計されているようだった。そのほか、大賑わいのキャンティーンやバー、シアターなどスタイリッシュな施設が密集していた。

広場では作品が展示されていたり、ワゴンで



CSMのキャンパス内部

ユース品の配布が行われていたり、ストリートピアノが置かれていたり、終始活発な雰囲気だった。またこの日はちょうど国際女性デーにあたり、オープンマイクや“WOMAN LIFE FREEDOM”と掲げられた巨大なバナーへの寄せ書きなど、学生によるアクティビティが行われていた。

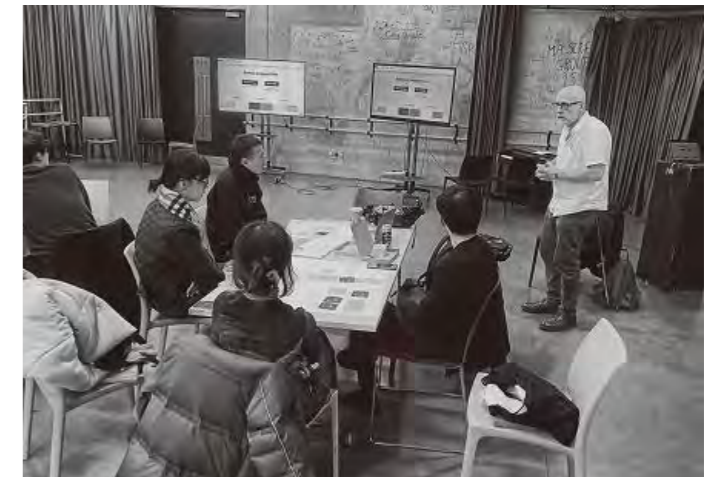
こうして、外の天気とは裏腹に“陽”のエネルギーが充満した構内を巡ったあと、Haywood先生が近年開発に力を注いでいるツールキット「REBEL」を使ってのワークショップに取り組んだ。これは、個人やグループが自らの学習経験を評価し、今後の活動のアイデアや指針を探ることを手助けするために作られたキットである（<http://rebel-tool.org>）。世界中の様々な教育現場で広く活用されることを想定しており、すでに日本語版の制作も進められている。

今回のワークショップでは2人1組のペアとな

り、「REBEL」を使って将来のコラボレーションの可能性について考えるグループワークを行った。キットは6つのカテゴリーに分かれた108枚のカードによって構成されており、それぞれのカードには多種多様な価値観や趣向、特性、スキルについて書かれている。このなかから、自分たちが共通して関心を抱く対象や、得意としている分野のカードを選び、テーブルの上に並べていく。そうして、各グループが自らの強みや傾向を認知し、コラボレーションを行う上での課題や必要なものについて検討するという内容であった。

各グループからは、クィアをテーマとした展示企画、ダークツーリズムを捉え直す試み、漫画や写真芸術など様々な領域を横断した新たな形でのアーカイブプロジェクト、世界中のお祭りを体験できる恒常的なスペースの構築、ジェントリフィケーションが進む地域を舞台としたAR作品、音楽パフォーマンスと研究報告とを組み合わせた政治議論の場を作る、などなど様々なコラボレーションのアイデアが挙がっていた。

キャンパス見学のようす



「REBEL」を使用したワークショップのようす



ワークショップを終えて

A Flaneur in London Contemporary Art

李 静文

どの現代都市もひとしく、街には同じようなブランドの店が立ち並び、人々は同じような服を着ており、レストランでは同じようなメニューの料理が提供されている。地元民も観光客も、そのような都市ではスマートフォンのマップさえあれば安心して過ごすことができる。どの道を歩き、どのバスに乗ればよいか、この本屋は今日お休みで、あそこの食べ物はまずいなどと、何でも教えてくれるのだ。ロンドンを訪れるのは今回が初めてだったが、やはりどこかで均質化された大都市のイメージを抱いていた私は、あえて目的地を細かくは定めず、現金すらほとんど持って行かなかった。

飛行機から降りてすぐ、3年ぶりに会う写真家の友人に連絡した。思えば3年前に会った時は、一緒に散歩しながら東京の街を案内したのであった。万能なスマホを携え、ロンドン在住の友人もいるのだから心配はない。ロンドンにおける美術文化の集積地を中心に、展覧会を観ながら散歩することに決めた。

ロンドンのSohoエリアには多種多様なギャラリーやアートスペースがあり、世界中のアーティストの作品を楽しむことができる。伝統的な絵画や彫刻から、現代のメディアアート、ストリートアートまで幅広い作品が展示されており、アートマーケットの場としても重要な役割を担っている。公立の美術館や博物館などの機関も併せると、ロンドンのアート・エコシステムのきわめて多様なあり方が顕れている地域だといえる。

私たちはSohoの画廊をあちこち巡ったが、なかでも筆者が最も魅力を感じたのは、Sprüth Magers Galleryで開催されていたJon Rafmanの展示《Ebrah K'dabri》である。作品はもちろん、ギャラリーの建築やキュレーションも注目に値するものだった。ギャラリーの1、2階は大きなガラス張りのショーウィンドウとなっており、地下のフロアはまるでピラネージの絵画のごとく、ドーム状の屋根から地上の光が注ぎ込む構造の空

間となっている。

Jon Rafmanの作品は、仮想現実、ネットカルチャー、ビデオゲームなどの分野に関わるもので、彼はデジタル世界において、膨大な情報が複雑に絡み合うことで生じるカオスにまつわる謎や暴力性を主題に据えている。Rafmanはネット住民にとっては馴染み深いビジュアルを引用しながら、妄想的で超現実的な世界を提示する。筆者もかつて研究で取り上げたことがある“Nine Eyes”シリーズでも、彼はGoogleストリートビューで多くの画像を収集し、慣れ親しまれたこれらの素材を再構成・編集することで、現実とは異なる仮想世界を作り上げていた。今回の展示においても、アルゴリズム生成技術を用いて作られたビジュアルアートや、重層的なゲームの構造を持つ映像作品“Punctured Sky”など、昨今のデジタルライフと直接的に結びついた、没入的な体験ができる世界が構築されていた。それは現代社会におけるテクノロジーと文化との関係性を問い、観客にイメージネーションや探求心を呼び起こすものであった。

また、同じくデジタルアートを中心に活躍したGretchen Benderの展示も同時開催されていた。彼女は、Sprüth Magersの前身であったドイツ・ケルンのMonika Sprüth Galerieによる1987年の画期的な企画《Eau de Cologne》で展示をおこなって以来、当ギャラリーとは特に結びつきの深かったメディアアーティストの一人だ。Benderの作品は、特にポピュラー・カルチャーやマスメディアを批判的に捉えつつ、デジタルメディアが社会や文化、個人のアイデンティティに与える影響について探究するものであった。

このように、Sprüth Magersは異なる時代のデジタルアート作品を同時に展示することで、それぞれの時代における表現スタイルの違いを浮き彫りにしていた。また、デジタルアートの持つ政治性や批評精神、革新性、そして文化やアイデンティティの問題に対する持続的な関心などが、多角的な視点から提示されていた。

コマーシャルギャラリーにおいては、このような凝ったキュレーションはあまり目にする事ができない。もともとSprüth Magersは、1998年にMonika SprüthとPhilomene Magersという2人の女性キュレーターがリーダーとなって設立された。彼らは男性が主導するアートマーケットのなかでさまざまな逆境に晒されながらも、高い水準のキュレーションを行い、他のギャラリーとは一



Sprüth Magers のショーウィンドウ

線を画する独自の路線でグローバルな展開を行ってきた。

私はそうしたSprüth Magersのスタンスに共感したのだが、反対に、Tate Modernへ足を運んだときは少なからず違和感を抱いてしまった。先述した《Eau de Cologne》は、女性アーティストたちが集まり、展覧会や出版を行う企画であったが、それは女性としての立場を強調するというよりも、芸術家としての彼女たちの美的探究のあり方や社会への視座を広めるものだったといえる。今回の滞在中にTate Modernで催されていた4つの企画展のうち3つは、女性アーティスト（草間彌生、Mária Bartusová、Magdalena Abakanowicz）にまつわるものだった。草間彌生の展示はソールド・アウトしていたため観ることができなかったが、その他の2つの展示を鑑賞し、解説文を読んだ限りでは、女性アーティストを定義づける手法があまりにも型にはまりすぎているように感じられた。

特にAbakanowiczの展示では、ファイバー・アート“Abakans”における柔らかな素材性や、安定性を追求する作者の姿勢に、過度に焦点を当てている向きがあった。素材性はもちろん取り上げられて然るべきだが、彼女のオリジナリティは、織物を立体化・巨大化し、天井に吊るすことで生まれる彫刻的空間という発想に特によく表れている。また、筆者は以前彫刻を専攻していたため、Abakanowiczの人体像やランドアートについて触れる機会が多くあったのだが、彼女の戦争に対する思いや、広大な自然空間における人間の存在への認識が豊かに作品に表現されていたことが記憶に残っている。彼女の作品表現においては、生きた人間の存在や行動は景観の中の一部として組み込まれており、なかでも“Abakans”は本来、鑑賞者が実際に手で触れることができるという、参加性が強調された作品でもあったのだ。ところが今回の展覧会では鑑賞者が作品に触れることはできず、単にアートを眺める傍観者にしかなり得なかった。皮肉にも我々は、Abakanowiczがかつて黄麻布を膠で固めて作った中身の無い人体彫刻のように、佇むほかなかったのである。

そのほか、Serpentine North Galleryで行われていた《Barbara Chase-Riboud: Infinite Folds》

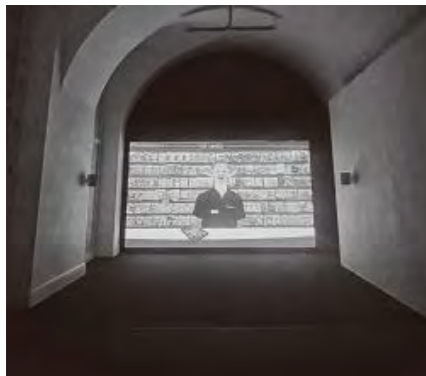
や、Saatchi Galleryで観た巡回展《BEYOND THE STREETS LONDON》も印象的だった。前者のギャラリーは建築家Zaha Hadidの手によって設計された、ハイド・パーク内に位置するSerpentine Galleryの分館である。日本にも公園に隣接した美術館はたくさんあるが、私自身はあまり気に留めたことがなかった。しかし、歩きまわるだけでも長い時間がかかるハイド・パークのスケールの大きさを目の当たりにすると、都市における「公園」という場所の作為性や暴力性について改めて考えさせられた。散歩の途中、公園を飛び回る鳥たちにエサを与える人々の姿が、否が応でも目に入ってくるのだが、その牧歌的な光景は巨大な力によって人工的にコントロールされたものでもあると感じ、複雑な感情を抱いた。

一方後者の展示は、また異なる都市風景を見せてくれた。この巡回展では、ストリートの光景を美術館に再現し、アーティストのアトリエやレコード屋、小売店などを「展示」していた。もちろんアトリエにアーティストがいるわけでも、レコード屋が営業しているわけでもなく、それらは展示品として陳列されているのだ。しかし面白いことに、観客はまるで実際の街のなかにいるかのように振る舞い、あちこちで記念写真を撮り、作品の前でポーズしていた。それは普段ミュージアムの中ではなかなか見られない新鮮な光景だった。

ロンドンで現代アートを巡りながら街を歩いていると、歴史的な建築と現代的な建築が入り混じった独特の光景に目を奪われた。筆者は前述の通り、コマーシャルギャラリーや美術館などの施設は、どの都市においても均質化されているというイメージを抱いていた。しかしロンドンのギャラリーに実際に足を運ぶと、そこには実にさまざまなバッググラウンドを持つ人々が集まっており、多種多様な芸術や文化が生み出されていく強烈なエネルギーが充満していることに感銘を受けた。



Tate Modernで行われていたMagdalena Abakanowiczの展示



Jon Rafmanによる映像作品
“Punctured Sky”

ポストコロナ時代のフォトグラフィック・アート

金 秋雨

今回のロンドン研修では、現在のイギリスにおけるフォトグラフィック・アートのシーンを中心にリサーチを行った。前回ロンドンを訪れたのは修士課程に入学する以前のことで、まだ自分の研究対象はうまく定まっていなかった。しかし4年ぶりとなった今回の滞在では、Tate Modern、Saatchi Galleryなどの著名なミュージアムやギャラリーへの訪問はもちろん、より自らの研究分野に近い調査を重点的に行うことができた。また、コロナ下にオンラインでインタビューやリサーチを行ったロンドン周辺在住のアーティストやキュレーター、研究者たちに実際に会い、イギリスにおけるアートの現場の雰囲気をリアルに体感することができた。

本稿では、今回の研修中に取材した3名（フォトグラファー、研究者、アーティスト）について報告することとする。

フォトグラファーLi Jiayueに聞く、ロンドンにおけるファッション・フォトグラフィーの現在

Liはロンドンを中心に、ヨーロッパや中国各地でも広く活躍するファッション・フォトグラファーである。現在はロンドンの写真事務所所属しながら、個人としても、長期的なフォトグラフィーのプロジェクトを数多くディレクションしている。今回、LiとはThe Photographers' Gallery、Centre for British Photographyなど、写真作品を中心的に扱うミュージアムと一緒に回りながら、意見交換を行った。

もともとイギリスには独自の豊かな写真文化の歴史があり、ファッション・フォトグラファーについても、レベルの高いカラー暗室技術を持つことで有名である。しかしLiは近年、その表現の多様性が失われはじめていることについて、現場で活動しながら常に危機感を抱いているという。美大で写真教育を受けた、美術史や写真史の豊富な知識と高い技術を持つ優秀なフォトグラファーがどんどん増えている一方、コロナ禍の影響でファッション業界全体が深刻な打撃を受け、今のロンドンのシーンはもはや写真のクリエイティブ性、芸術性を重んじるというよりも、ほとんど単なる価格競争と化してしまっている側面が大きいという。日本のシーンも似た問題を抱えているが、ロンドンでは確かに、写真のインディペンデント・ギャラリーやスペース、雑誌が極端に少な

いように感じられた。ファッション・フォトグラフィーの未来に対する彼女の強い懸念が、今後もっと多くの国や地域において広く共有され、議論できる場が増えることを願う。



雑誌“The Gentlewoman”のページを開くLi Jiayue。写っているのは彼女が撮影したスタイリスト、Reina Ogawa

研究者Ellen Yiwei Wangに聞く、フォトブック研究が抱える課題

Ellenはオックスフォード大学で博士課程に在籍するかたわら、イギリスのフォトグラフィック・アートシーンにおけるきわめて重要なフェスティバル“FORMAT International Photography Festival”のソーシャルメディア・オフィスでも仕事をしている。残念ながら開催時期が異なるため、今回は実際のフェスティバルに足を運ぶことはできなかったが、Ellenと中国出身のキュレーター・H氏との3人でオックスフォードへ出向いた。雨の中、歴史学部のキャンパス内にある小さな庭を覗きながら、お互いの研究についてアドバイスしあう貴重な時間を過ごすことができた。

フォトブック、いわゆる「写真集」は写真の発明とほぼ同じくらい長い歴史を持つが、近代におけるフォトブックの歴史研究において、日本の写

オックスフォード大学歴史学部のキャンパス内にある小さな庭



真集史は重要な地位を担っている。筆者はその専門ではないが、Ellenの研究のメインテーマはアジアにおけるフォトブックの歴史についてであるため、関心が重なる場所が多かった。彼女によれば、英語圏ではアジアのフォトブックについて手に入れることのできる研究や資料があまりも断片的だという。もちろんフォトブック研究に限ったことではないが、非西洋文化圏の研究を行うにあたっては、それぞれのリサーチの文化的背景、場所性や時代によって様々な相違がみられることを意識する必要があると感じた。

アーティストFaust Luoの暗室、スタジオへの訪問

今回の研修と一緒に参加した、同じくGA博士課程の学生・李静文の紹介で、ロンドン在住のアーティスト・Faust Luoと知り合った。幸運なことに、彼のスタジオと暗室を訪問し、作品について様々な議論を交わすことができた。

彼が制作のために通う“Rapid Eye”は1996年にオープンした暗室で、イースト・ロンドンの閑静な住宅街の一角に位置する。建物は3階建てとなっており、2階はオープンスペースで、3階に暗室が5室用意されていた。なかには、ファッションやドキュメンタリー分野で活躍している写真家、Jamie Hawkesworthが使用している暗室もある。

現像液や定着液のノスタルジックな匂いが混じりあった暗室のなかで、Faustは過去作の話から最近の作品構想に至るまで、多くのことを教えてくれた。彼の作品のスタイルは、ファウンド・フォトのカラーージュからスナップ写真、イギリスの小さなバーの演奏者を追ったドキュメンタリーまで実に幅広い。

彼が悩みとして挙げていたのは、世間の人々がLGBTQの写真家による作品を一括りに、セクシャル・マイノリティに対する社会的な偏見や差別について取り扱ったアート作品として認識する場面が多い点である。作家としては必ずしもそうではなく、単に自己の欲望を表現したい場合もあるのだが、社会問題を想起させない作品は良い作品ではないとみなされてしまうような現状に、彼は違和感を感じているのであった。

筆者自身も今になって、果たして鑑賞者がどこまで俯瞰的にフォトグラフィック・アートを評価することが可能なかと考えさせられた。

またそのほか、Wellcome Collectionの2階で開催されていた、イギリスの写真家Jim Naughtenによる歴史的なコレクションを再考する展示“Objects in Stereo”も印象深かった。ステレオスコープでの鑑賞を通して、コレクションの展示に

おける新たな可能性が提示されており、アーカイブの意味についても改めて考えさせられる内容だった。greengrassiでは、個人的に強い興味を抱いているアーティスト・Moyra Daveyの2作品を展示した空間のなかで、パフォーマンス・アーティストであるJanice Kerbelが不定期のパフォーマンスを行うという、グループ展とも似て非なる企画が催されていた。それはパフォーマンスとイメージの関係性や、「ライブ」や「記録」とは何かといった問いかけを、観客に間接的に強く意識させるものであった。また、Raven RowやSprüth Magersなどで鑑賞したビデオ・アートを中心とする展覧会も刺激的だった。

グラフィック・アートは、他の表現手段と比べて流通性が高く、複製性も強いいため、展示のスタイルも多岐にわたる。そのため、リアルな空間で展示を鑑賞し、意見交換することの意義についてはあまり深く顧みられることが少ないように思う。しかし今回のリサーチを通じて、実際の展示会場におけるオーディエンスの雰囲気や、空間を移動することで生じる感覚の変化といったものは、オンラインでは味わうことのできない重要な体験なのだ、改めて確信した。大変貴重な機会をいただいたことに、心から感謝したい。



Rapid Eye の2階で発見した、暗室の利用者による可愛いカラーージュ

ロンドンのインディペンデント音楽シーンと DIY

宮坂遼太郎

今回の滞在ではロンドンの音楽シーン、とりわけインディペンデントに活動を行うミュージシャンのありようについて可能な限り目撃することを主な目的とした。筆者は今春ちょうど大学院を修了し、フリーランスのミュージシャンとして活動を行っていく立場にある。このタイミングでロンドンの音楽シーンを見ることで、自分が何をやっていきたいのかを改めて見つめ直す契機にしたい、そして可能であれば現地のミュージシャンと交流し、刺激を受けてモチベーションを高めたいという気持ちが強く、本プログラムへの応募を決めた。

ロンドンの音楽シーンには以前から興味を持っていた。筆者も数年前から興味を持って演奏しているアフロビート（ナイジェリア発祥の音楽）の影響を受けたジャズのスタイルが近年のイギリス、特にロンドンにおいて流行しており、その動向を追い始めたのがきっかけである。また音楽の内容だけでなく、こうしたスタイルが生まれるきっかけとなったNPOによる無料のジャズスクール“Tomorrow’s Warriors”の存在や、当該プログラム出身のミュージシャンも多く参加しているという音楽パーティ“Steam Down”、そして同じく出身者らがDIY的に運営しているという録音/練習スタジオ兼シェアハウス“Total Refreshment Centre”などについても非常に気になっていた。筆者は、既存の音楽産業の中に入っていきよりも、それとうまく距離をとりながら独立した形で活動を充実させ、ゆるやかなコミュニティを形成することで立場の弱いミュージシャン同士が助け合い、協働していけるような道筋を作っていくことが、社会的に意義があると考えており、また個人的な趣向とも重なる。そこで、近しい姿勢で音楽に向き合いながら素晴らしいミュージシャンやバンドを多数輩出しているこれらのシーンには強く惹かれており、今回必ず接触したいと考えながら計画を練った。

今回最も印象に残った体験は、Total Refreshment Centre（以下TRC）への訪問だったかもしれない。非常にラッキーなことに、現在TRCには日本人のドラマーであるF氏が入居しており、彼の手厚い案内により非公開のスペースである当地を訪問、見学させてもらうことができた。TRCは数ブースの録音スタジオと練習スタジオを備えており、毎日異なるバンドやDJなどが来

訪する。これだけであれば通常のスタジオと変わらないが、特筆すべき点として、かなり広めの共有スペースが存在することが挙げられる。筆者がTRCを訪れた3月7日には、4組ほどのミュージシャンたちがここで曲のアイデア出しやトラック制作に精を出しており、初めて目にする同所多発的光景が広がっていた。F氏によれば、同席したミュージシャン同士の交流が起こることは常であるらしく、各個がそれぞれの殻に閉じこもるように設計されている通常のスタジオにはない広がりを感じさせられる。

また、運営者とミュージシャンの関わり方にも密接な雰囲気があり、ゆえに何日も通い込み、昼夜通して制作を行う合宿のようなやり方も可能となっているようだ。筆者はちょうど、若手のジャズ・コレクティブが2週間以上の合宿を行なっている場面に遭遇した。集団演奏で音楽を作り込む上で合宿的行為は大いに必要である一方、それを行える場所が少なすぎるとまさに感じていたタイミングでもあり、こんなことがやりたい、これができる場所を設計したいという具体的な目標が生まれた。

そしてもう一点、この場所が年齢の壁を超えたコミュニケーションの現場になっているというのも魅力的であった。合宿中の彼らは20歳前後であったが、運営の中心となっているのは40代や50代のミュージシャンであり、下は高校生くらいから上は50代に至るまで、幅広い年代が自然に同居するような空間となっている。このスペースが生まれたのは最近のことではなく、立ち上げから長い間、立ち退き要求との闘いを経て10年以上続いてきたという。その間に積み重なったネットワークが結果的に年代を飛び越えるものとなり、多彩なコミュニケーションの発信地となっているという事実に感動を覚える。今後自らスペース的なものを設計しようと志す上で、TRCはその気持ちを勇気づけてくれる貴重なモデルとなるに違いない。

もう一つ特筆すべき体験を選ぶと、最終日に参加することができたDIY型の音楽パーティ（情報が表に出ていない、半招待制のクローズドなものであり、名称は最後までわからなかった）が強く印象に残った。連れて行ってくれた現地在住の日本人DJ・H氏によれば、このパーティはニューヨーク



Total Refreshment Centre 共有ロビー

の伝説的DJであるデヴィッド・マンキューソがロンドンで開催したパーティから派生したもので、自前の音響機材・照明や装飾を様々な場所に持ち込みながら行われているのだという。大型の機材を運搬し設置するには当然大きな労力がかかるが、これは同パーティに魅せられ、また趣旨に賛同した多くのサポーターによって支えられている。大掛かりな資本による運営で利益を生み出すのではなく、個人単位で連なりながら小規模にお金を回しつつ、大きな活動をやってのけようとするボトムアップ的精神を感じさせられた。

このパーティでは、筆者がかねてから愛好しているロンドン在住のDJ、Donna Leakeがプレイしており、運良く最前列で目撃することができた。Donnaはかつて日本向けのインタビューで、音楽を楽しむことと音質の良さがいかに密接に結びついているかを語っていた。大事に受け継がれてきたであろうこのDIYパーティの音響機材もまた、個人単位で管理されているものとは思えないほどにいい音で、非常なこだわりを感じさせられた。事前に日本で読んでいった、ジャズライター柳楽光隆氏によるロンドン・ジャズシーンについての取材記事 (<https://nsom.org/n/nbec0819d31eb>) においても、その「DIY」性、当事者たちが能動的に教育の場や音楽行為の場を整えようとする姿勢について語られていたが、前述したTRCと併せ、筆者もまた同じようにその雰囲気を感じ取ることができた。これはとてもエキサイティングな経験で、大学院を修了するこのタイミングで行けて本当に良かったと思う。

他にも、実験音楽やパフォーマンスアーツを支援するレジデンス兼ライブベニュー“IKLECTIK”や、工場地帯に位置する中規模のダンスクラブ“The Pickle Factory”、そして前述の“Steam Down”などを訪れることができ、毎日音楽漬けで過ごすことができた。そんな中、小さな会場から大きな会場までどこに行っても満員で、お客が（いい意味で）うるさく、元気なことが印象に残った。日本はどちらかというと静かに鑑賞しようとする姿勢が強いという肌感があるので、ロンドンの会場が持つ「全員で盛り上げてなんぼ」というムードはすごく新鮮だった。そっくりそのまま真似しようというわけでも、ロンドンこそが至高であるというわけでも勿論ないが、「こういうやり方もある」という例を、短い間とはいえたくさん見ることができた。このことはきっと忘れないだろうし、忘れたくない。

大変貴重な機会をいただいたことに心から感謝します。ありがとうございました。



最終日のパーティの様相

展示空間のなかに配置された仮設空間への考察： ロンドンで観た若手作家によるインスタレーション・アートについて

中島里佳

2014年から2018年までのあいだ、私はロンドン芸術大学でファインアートを専攻していた。卒業後に帰国し日本の環境の中に身を置くなかで、ロンドンにいた当時の記憶もずいぶんと遠いものになっていた。ロンドンで現代美術に出会い、制作を開始して今も東京を拠点に作家活動を続ける私は、以前から東京での経験とロンドンでの経験を改めて比べてみたいと考えていた。そんななか、幸運にもこのプロジェクトに参加できたことは大変光栄であり、改めて感謝を申し上げたい。

研修期間の約7日間、私はロンドンの現代美術の展覧会について調査を行った。今回着目したのは、インスタレーション・アートの新しい風潮である。インスタレーション・アートは、現代美術における一つの表現手法として確立されているが、昨今の展覧会においては一つの基盤と言ってもよいほどに、インスタレーションによる表現があらゆる展覧会で増えているように見受けられた。本稿では、ロンドンで鑑賞したインスタレーション作品を軸とする展覧会（主に個展）について紹介すると同時に、展示空間の使用と展示室の内側・外側についての考察をまとめる。

まず、コマーシャルギャラリーで展示されていた2つの展示作品、Edel AssantiのJenkin van Zylによる《Surrender》とSadie Coles HQのJonathan Lyndon Chaseによる《Now I'm home, lips that know my name》。前者は映像作品、後者は絵画を主軸としつつも、両者ともに空間における経験を演出するインスタレーションが施されていた。



(pic. 1) R.I.P. Germain 《Jesus Died For Us, We Will Die For Dudus!》展示

両者のインスタレーションは偶然にも、展示室の中心エリアを仮設的な寝室のインスタレーションとして展開し、両者に共通するテーマであるキア的、幻覚的で没入感のある非現実的な作品手法に対する、生々しい性愛による私的空間という演出が際立っていた。両者の空間へのアプローチは、ホワイトキューブという伝統的な展示空間を巧みに包み込む、または仮設空間と対比させ、演出を際立たせるものであった。

次に紹介するのが、Zabludowicz CollectionのLu Yangによる《NetiNeti》とWhite Chapel Galleryで開催していたZadie Xaによる《House Gods, Animal Guides and Five Ways 2 Forgiveness》である。先述の2名の作家にも共通するインスタレーション作品だが、アジアをルーツとするこの2人のアーティストはともに東アジアの宗教の記号的なエレメントを用いながら、作品を全く別の方向へと展開していた。Lu Yangのインスタレーションでは仮設的な小部屋の演出はなされていなかったが、日本のゲームセンターを想起させるようなインスタレーション空間となっており、各ゲーム機に振り分けられた個人の空間が、スクリーンとゲーム機を介して演出されていた。一方でZadie Xaの、韓国の伝統的な家屋である韓屋（ハノク）をモチーフにした大規模な布の構造体は、レンガ壁による西洋的なギャラリーの建築物にアジアの視点から新たなレイヤーが加えられた神殿のように展示空間に設置されていた。(Zabludowicz Collectionはイスラエル国家と継続的に結びついており、これを受けて、2021年ごろから厳しい批判が繰り返されている。その関係性は今なお改善されていないという。私は本展示を観た後、現地のアート関係の知人からこのことを知った。これらの状況は少なくとも英語圏のアートワールドでは有名な話であるようだが、今回の出展作家がそのことを知っていたかは分からない。その上で、作家の生と死の探求というテーマと、イスラエル国家への支援と結びついたZabludowicz Collectionとの関係は、暴力性を皮肉にも膨張させるかなり危険な展示であった。これについては以下を参照されたい。

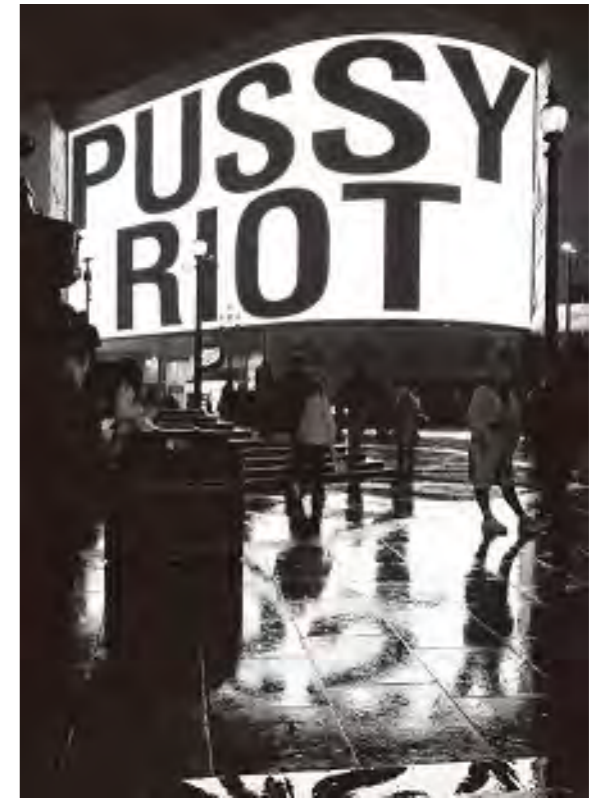
<https://news.artnet.com/art-world/zabludowicz-boycott-deauthor-1992711>

以上のように、ジェンダーや人種といった作家自身のアイデンティティは、展示空間のしつらえにより敏感に影響を与えあっていると考えた。そ

して今回私が一番刺激を受けた展示は、ICAのR.I.P. Germainによる《Jesus Died For Us, We Will Die For Dudus!》(pic. 1)である。ICAの一階部分には、展示室の中心に建てられた仮設ガレージのような外壁があり、その内側には誰かの家の3つの部屋の内部が演出されていた。人のいない空間から、一体どのような人物の家なのかを想像させ、そこに設置された日用品やゲームなどを介して他人の生活を仮想体験する展示内容であった。それは、観客の身体や立場が展示空間に入り込むと同時にそこに位置付けられる経験でもあり、作家のステートメントにもあるように、解説文によって容易に消費されるものではなく、深い真実へと語りかける作品だった。上階のギャラリーでは、黒人のアイデンティティに関わりがある実在のジュエリーショップと作家がコラボレーションしており、観客は展示を鑑賞しているうちに、意図せずいつの間にか巻き込まれるような内容であった。展示空間と通常混じり合わない意外な空間を介入させる手法が用いられていた。

R.I.P. Germainと他の展覧会では、消費される作品の形態に問題意識を持っているかどうか、という点でも異なっていた。映像作品や絵画の鑑賞環境に本当にインスタレーションが必要なのかも問うべきであると感じた。特に、昨今は展示空間を写真映えするものとして演出する手法に対して、それを受け入れつつも、空間でしか得られないものを演出することが、今後、インスタレーション作品を考える上で重要な点でもあると考える。また、西洋では特に人種やジェンダー等におけるマイノリティへの配慮のもと、作家自身のアイデンティティへの眼差しがよりステレオタイプに作用し、消費されやすくなっている現状についても不安を感じた。これらの点は、私自身も今後の活動をする上で考えていきたい課題となった。

最後に、コロナ禍直後にスタートしたCIRCAプロジェクトによるロシアのアート・アクティビストコレクティブ、Pussy Riot (Nadya Tolokonnikova)の映像作品《Nadya Means Hope》(pic. 2)について。このプロジェクトは独自のエコシステムを作りだした点や、アートを通して社会に投げかける持続的プロジェクトである点から様々な画期性があるが、まずヨーロッパ最大の巨大広告スクリーンに現代美術が介入する状況そのものの美しさに感動した。現在も戦争が続いている一方で他の場所では平然と日常が続くなか、紫色のスクリーン画面によってロンドン中心部の都市空間が紫色に染まり、多くの人が足を止めじっと火が燃えるのを見つめていた（日本を含めて世界中で展開されているプロジェクトであるが、モニターの大きさや場所性から体験がかなり異なった）。これは、上記で言及した消費される現代アートの問題点と矛盾しているかもしれないが、展示室の外部である都市の消



(pic. 2) CIRCA presents Pussy Riot / Nadya Tolokonnikova 《Nadya Means Hope》

費空間のなかに現代美術を介入させることでアートと消費者との関係を逆転させる作用があるのではないかと思う。特に、多くの観光客が写真を撮るスポットであるピカデリー広場に突如として広告でない不思議な映像（今回はテロリストのような風貌の人物が、ナスの絵文字を模した巨大キャンドルに火をつけて火が燃えるのを待つというシュールな映像）が現れる状況は、芸術が投げるメッセージ性と、単に消費を促す広告との違いをはっきりと示しているように思う。

私自身の関心が展示空間と作品の関係性にあるため、レポートの内容もそれらに限られたものとなったが、ギャラリー内に設置された仮設の空間の展示をはじめとする展示空間との対話は、現代美術においてインスタレーションの文脈に限らず、それを超える文脈との関連においてより重要性を帯びている。また、現地で活動する同世代のアーティストの知人からは、物価が高騰しているロンドンにおいて作家活動を続けることが極めて困難になっていると聞いた。様々なアートが世界中から集まり、変わらずクオリティの高い展示を生み出すロンドンの背景にも、かなり複雑かつ難しい側面があることは確かである。実際にここでは書ききれないが、展示空間の表舞台だけでは見えない物事も今回の研修を通して実感した。今回の体験は、今後の活動において自分がどの場所で制作を続けるべきなのかについてより深く考えるきっかけとなった。これからも、作家活動の中で展示する場所や自分の居場所について考え続けていきたい。

クィア、物語、中空のグリッド

長尾優希

馬に乗った兵士が鋭い槍で、迫りかかるライオンをぐさりと刺し貫く。アッシリアのレリーフは、帝国の王たるアッシュルパニパルの獅子狩りの様子を、微に入り細を穿つような手つきで活写していた。しかしその表情はレリーフゆえの黄土色もあいまって、物語的な血なまぐささにもかかわらず、兵士もライオンもあまりに無感動だ。観察してみると、物語は左から右に向かって進行しており、開かれたライオンの口に槍が接触するときドラマ的な山場を迎える。ところがレリーフはそこでは終幕せず、槍の斜線はライオンの背へまっすぐに通じている。この想像的につながって伸びゆく線が、巧まずして観者の注意を暴力的な物語のクライマックスから逃がすのである (Leo Bersani and Dutoit Ulysse, *The Forms of Violence: Narrative in Assyrian Art and Modern Culture*, New York: Schocken Press, 1985, 8-15)。

クィア理論の先駆者レオ・ベルサーニはユリス・デュトワとともに、『暴力の形式——アッシリアの芸術と現代文化における物語』において以上の分析を展開した。僕が先日書き上げた論文の重要な箇所がこの本を参照したのは、この理論家の思考の特異性が端々から垣間見えるからだ (長尾優希「ベルサーニの暴力的ケア/サエボグの横滑りする身体」『Gender and Sexuality』18号、近刊)。この春から博士後期課程に進学しクィアの研究者として歩を進めようとしている僕にとって、大英博物館に所蔵されているこのレリーフを図版として使用できる写真に収めることはロンドンでの大



アッシリアのレリーフ (ライオン狩りの様子)

きな目的だった。そして今回の渡航を決めたのは同時に、現地でクィアはいかに語られているのか、いかに表象されているのか、そうした動向を視察しようという狙いもあった。

こと美術界はクィアに友好的な雰囲気満ちていた。クィアのみならずマイノリティ解放の声がそこかしこから響くようで、ふらりと立ち寄ったギャラリーがそうしたアーティストを取り上げていることもしばしばだった。Queer Britain に行く。2022年の5月に——同様のクィアのアート・スペースである Queercircle と同時期に——開館したこの比較的こぢんまりとした美術館は、ロンドンのLGBTフレンドリーな雰囲気を象徴するかもしれない。イギリスの小説家オスカー・ワイルドは1895年、同性愛的な行為が理由で投獄される。展示はワイルドが収監されていた刑務所の扉からスタートし、そのようなホモフォビックな歴史を直視するように時系列で追ってゆく。クィアな者はそうした歴史を経て、それでもプライドをもって生き延びるといったハッピーエンドの物語が提示される。

正直なところ気圧された。それは既に指摘されているような、アジア系のクィアが可視化されていない (齋木優城「この初夏ロンドンにオープンした2つのクィア・アーツスペースとは? Queer Britain と Queercircle をレビュー【プライド月間】」. <https://www.tokyoartbeat.com/articles/-/queerbritain-queercircle>.) といった事態への違和感ではない。クィアを形成した歴史を屈託なく語ることそのものへの抵抗感である。起源を定め正史を打ち立てること。自分たちの物語を語ること。それによって「社会的なアイデンティティの実体化された形式」、つまり「クィアの人たち」である自分自身を確立すること (Lee Edelman, *Bad Education: Why Queer Theory Teaches Us Nothing*, Durham, NC: Duke University Press, 2022, 55)。このようなクィアの本質化は、結局のところ、自らを本質化しそのことでクィアを排除してきたマジョリティの論理に包摂されるに過ぎないのではないか。これは研究の対象、目的、方法論などすべてにおいてバラバラであり、それを是としてきたクィア理論がほとんど唯一共通して問うてきた懸念であったはずである。

「グリッドの絶対的な均衡状態、階層的秩序と中心と抑揚の欠如は、たんにその反指示的な性格が



Queer Britain 《We Who Live in Prison》
(ワイルドが収監されていた牢獄の扉)

かりでなく、——さらに重要なことには——物語への敵意を強調する。時間と出来事とともに受けつけないこの構造は、視覚的なものの領野への言語の投影を許そうとしない。そしてその結果が沈黙である。この沈黙は、たんに、語ることに對してグリッドがきわめて効果的にバリエードとして働くことによってだけでなく、外部からのあらゆる侵入に対してその網の目が発揮する保護力によっても生ずる」(ロザリンド・E・クラウス『アヴァンギャルドのオリジナリティ——モダニズムの神話』谷川渥・小西信之訳、月曜社、2021年、237頁、傍点引用者)。

Photographers' Gallery における展示「A Hard Man is Good to Find!」は、Queer Britain で語られていたホモフォビックな時代のロンドンにおけるゲイの秘史を特集していた。膨大なアーカイブから掘り起こされたスナップ写真の数々は、歴史から抹消されたゲイの存在を浮かび上がらせる。キャプションなどで強調されはしないもののこの展示の一見して明らかな特徴は、その写真がグリッド状にずらりと並べられている点だろう。時として番号が割り振られて一様に整列されるゲイのヌード写真は、ほとんどファウンド・フォトのような様相を呈する。この被写体は一体誰なのだろうか。いや被写体はおろか、雑誌などのために商業用に撮影されたこれらのエロティックな写真はフォトグラファーすら特定できない場合も多い。匿名の者によって匿名の者が撮られた写真。それは個人の特定を許さない。クィアを実体化すること、本質化することのきっぱりとした拒絶が、こ

こにはある。別言すると、それはクィアを物語化から保護している、のかもしれない。

檻から獅子を放つ。ベルサーニ+デュトワは先の書を、この描写における「何をも幽閉しない=無を幽閉する檻」の分析で閉じていた (Bersani and Dutoit, 1985: 131)。これは何か。レリーフでまず目につくのは、やはりそろりと歩み出るライオンの様子である。暴力の物語を予示する不穏さのうちで注意を払わなければならないのはしかし、ライオンの檻の上部、子どもの腕と彼の佇む箱、ライオンの檻、そしてその扉がかたちづく——グリッドの1つを切り取ったような——中空なのだ。この中空はレリーフの語る暴力的な物語への意志を否定しない。ただその暴力のただ中に佇むのみである。

この中空が保護しているのは何だろうか。



Photographers' Gallery 「A Hard Man Is Good to Find!」 展示風景



アッシリアのレリーフ (ライオンを放つ様子)

インクルーシブな空間の現在形 —— コーヒーハウスから独立系書店へ

堀江 幹

1. 今回の目的

筆者にとってイギリス（イングランド）とは、サッカーでもフィッシュ&チップスでもなく「コーヒーハウス」の国だった。現代の喫茶店のような空間を指すコーヒーハウスは、17世紀にイングランドに伝わり、18世紀にかけて最盛期を迎えた。そこは単にコーヒーを飲むだけではなく、見知らぬ人同士、身分や貴賤の別なく対等な交流や議論が行われるインクルーシブな空間だった。そのこともあり、政治哲学や都市社会学の文脈ではしばしば理想的な空間として扱われてきた（しかし当時のコーヒーハウスは女人禁制であったため、本当の意味でインクルーシブだったとは筆者は思わない）。

しかしコーヒーハウス文化が衰退して以降、そうした空間はどこに存在するのだろうか。筆者はそれに対するひとつの仮説として、小規模な書店に注目した。後述するように、近年ロンドンでは個性的で政治性の強い小規模な書店が増加している。それらの書店は、選書や空間設計を通じてインクルーシブな空間を提供しているように思われるのだ。そのため今回の滞在では、まずイングランドのコーヒーハウス発祥の地であるオックスフォードの歴史的な店舗に足を運び、その後はロンドンの書店の調査を通じて、インクルーシブな空間の現在形を捉えることを目指した。

2. オックスフォードのコーヒーハウス

ロンドン中心部から北西方面に電車で約1時間の距離にあるオックスフォードは、中世的な雰



The Grand Café 外観

気を感じることでできる歴史的な街である。映画『ハリー・ポッター』シリーズのロケ地にもなった、イギリス最古の大学であるオックスフォード大学を中心に、街は平日にも関わらず多数の学生と観光客で活気に溢れていた。

筆者はまず1650年創業、イギリス（イングランド）最古のコーヒーハウスと言われるThe Grand Caféを訪れた。外観や内装には重厚さがあったが、店舗外壁やメニュー表、コーヒーカップなど至るところに書かれていた”The First Coffee House in England”という謳い文句を除けば、そこがかつてコーヒーハウス文化の中心地であったことを想像するのは難しいほど、店内の雰囲気は現在の一般的な喫茶店と変わらなかった。複数人で来店している客がほとんどで、見知らぬ人同士の偶発的なコミュニケーションも発生していなかった。

The Grand Caféを後にし、2軒目はそのすぐ向かいにあるQueen’s Lane Coffee Houseへ。こちらも1654年創業と非常に歴史のあるコーヒーハウスなのだが、1軒目と同様、店内の様子からその歴史を直接的に感じることは難しかった。これは筆者もある程度想像していたことではあるが、ここまで「普通」だと、少し肩透かしを食ったような気持ちにもなってしまった。

3. ロンドンの書店文化

オックスフォードでコーヒーハウスの聖地を巡った後は、ロンドン市内で書店文化の調査へ。近年Amazonや電子書籍の影響を受けた出版不況が叫ばれる一方、小規模かつ独自性を持つ、いわゆる「独立系書店」が世界的に増加しており、イギリスもその例外ではない。特にイギリスの書店文化を考える上で筆者が渡航前から注目していたのは、清水玲奈氏による記事（https://note.com/kyoto_wr/n/nd894101fcfee）でその存在を知った「急進派書店連盟（Alliance of Radical Booksellers、以下ARB）」だ。記事によれば、急進派書店とは「社会正義や政治に関する問題意識と主張を持ち、書籍の販売と関連する活動を通して、政治や社会、個人の変革を目指すことを目的に運営」される書店のことで、2023年3月現在、イギリス国内で50の書店がARBに加盟している。日本にも新宿のIrregular Rhythm Asylumや模索舎、下北沢の気流舎など近い特徴を持った書店は存在するが、その数はそこまで多くないように感じる。

今回の滞りで筆者が訪れたのは、ARB加盟店/独立系書店ではBookmarks、Freedom Press、Gay’s The Word、Housmans Bookshopの4店舗、その他に1797年創業のロンドン最古の書店Hatchards、大型書店チェーンであるFoylesとWaterstones、そしてテムズ川に架かるWaterloo橋の高架下で開催されていたSouthbank Book Marketである。

まず、独立系書店4店舗に共通していたのは、雰囲気のカジュアルさである。日本では政治的な主張の強い書店は「入りづらい」と感じられてしまうことが多いように思うが、当地ではさながらコンビニエンスストアのように、気軽に入店し本を購入している人が多いように感じた。そしてロンドンでは独立系書店に限らず、全ての書店で子供向けの本が充実している印象を受けた。例えば、大英博物館から歩いて数分の中心部に店舗を構えるBookmarksはマルクス主義理論を専門とする“socialist bookshop”であり、マルクス関連書籍を大量に取り扱う政治性の強い書店なのだが、スタッフの方は「子供も多く来店する」とはっきりお話されていた（筆者の訪問時は大人のみであったが）。実際に、店内奥には子供向けのスペースが設けられており、本だけでなく座って読むための小さな椅子まで用意されていた。幼い頃から気軽に書店に集い、本に触れ、社会について考える機会があるということの重要性を改めて感じさせられた。

4店舗の中では、King’s Cross地区で1945年から営業を続けるHousmans Bookshopが特に印象に残っている。ユーロスターの終着駅であるSt. Pancrasや複数の大学のキャンパス付近に位置するこの書店は、歴史的にアンダーグラウンドな活動の中心的役割を担ってきた。地上階と地下階の2つのフロアを持つ広い店内で特に充実していたのはZINEのコーナーで、手作り感のあるものから手の込んだプロフェッショナルなものまで、多種多様なZINEが置かれていた。スタッフの方によると、取り扱っているZINEは基本的に制作者からの持ち込みだとのことで、筆者のようにイギリス国外に住む人でも、配送もしくはデジタルデータの送付によって委託販売が可能とのことだった。社会で周縁化されている人々に焦点を当てた選書に加え、そうした敷居の低さや、（他の書店にも共通するが）気さくに話をしてくれるスタッフの存在によって、筆者を含む全ての人々が「ホーム」と感じることができるようインクルーシブな空間が形成されているように思われた。

最後に、書店ではないがSouthbank Book Marketへの訪問も貴重な体験となった。このマー

ケットの最大の特徴は、「川沿いの公共空間で」「毎日」開かれていることである。日本のブックマーケットは基本的に期間限定であり、その多くが商業施設や美術館などのクローズドな空間で開催される。そのため、マーケットを目的としない人を巻き込む可能性は限りなく低い。パリのブキニストに代表されるような川沿いでの書籍販売はいかにもヨーロッパ的な光景であり、本を取り巻く文化を考える上での、ひとつの理想形なのではないかと感じた。

4. おわりに

筆者が今回訪れた独立系書店は、選書や空間設計によって、その場所が誰でも対等に受け入れられるインクルーシブな空間であることを保証しているように思われた。それは普段の生活で生きづらさを感じている人々にとっての「セーフスペース」となる。さらにこれらの書店は、イベントの開催や出版物の制作など、書籍販売以外の活動も積極的に行っている。特に筆者の滞在期間と重なる3月8日が国際女性デーだったということもあり、（筆者は時間の都合上参加することができなかったが）その前後は各店舗で様々なイベントが開かれていた。

今回の滞りで、かつてのコーヒーハウスに代わるインクルーシブな空間の現在形を独立系書店から感じ取ることができた。それらの連続性はまだ筆者の仮説の域を出ないのだが、今後の更なる調査を通じて、その輪郭をよりはっきりさせることができればと思っている。



Housmans Bookshop 店内



Southbank Book Market

ロンドンを回遊する

尾上朝香

今回渡航前に設定した旅のテーマは「イギリスの葬送文化を目の当たりにすること」と「ジェンダー学の最前線を体験すること」の2つである。卒論に取り組むにあたって自分が重要視しているというだけの、一貫性のない二本立てでお送りする予定だったロンドン回遊だが、計画していたように物事は進まないものだ。帰ってきた今真っ先に思うことは、何か新しい物事を知ろう（学ぼう）とする時、まずはすでに知っているものとの比較から始まるという、分かっていたようで新鮮な気づきについてだ。新しい学びの最初の段階では、すでに知っているものに対する考察が深まるだけなのだと言った。

普段の私の学びは、自分がすでに知っているものとの位置関係がはっきりしているものに向かっていく学びだ。しかも、まずは言葉で、文字で、もっと言うと日本語で読むことができる情報から入っていく。だが、今回のロンドンでの体験は、自分がすでに知っているものとの位置関係が不明で、最初に入ってくる情報として、言葉よりも、匂いとか空気に敏感にならざるを得なかったため、そういった意味で特別な学びであったといえる。最初から気づいていてもよさそうなことだが、渡航前には全く思いあたらず、ただ漠然と、その土地に行けばその場所ならではの新しい知識を、今までの学びと同じような段階を経て、身につけることができるだろうと甘く見ていた。

そして、初めに一貫性がないと一蹴した旅のテーマだが、その2つの具体的なテーマから自分が一体何を知らなかったのか、そしてそれがそんなに簡単には手中に収められないものであるということも滞在中に徐々に分かってきた。

ロンドンに着いて、最初に驚いたのはウェストミンスター寺院だった。到着の翌日が日曜日だったため、無料のオルガンコンサートを目当てに向かった。首が痛くなるほど大きい上に、途方もなく緻密な建築に唖然としながら、日本で張り合えるとしたら奈良の東大寺だろうか、いじらしいことを考えていた。名古屋城じゃ無理だろうから、東大寺が何個あればこの巨大さと緻密さを兼ね備えた建物に近づけようかと、一生懸命高校の修学旅行のおぼろげな記憶と照らし合わせていた。

そんな調子だったから、帰国後に夏目漱石の『倫敦塔』を読んだときは驚いた。「九段の遊就館を石で造って二三十並べてそうしてそれを虫眼鏡

で覗いたらあるいはこの『塔』に似たものは出来上りはしまいかと考えた」とあったからだ。漱石には申し訳ないけれど、九段の遊就館が30個あってもロンドン塔には到底及ばないと思うが（特に規模の面で）、見知らぬ土地で出会った度肝を抜くような事象に自分が知っているもので対抗しようとするのは、今も昔も当然の反応なのだ確認でき、嬉しかった。昔学校で『こころ』を読んだ時に落胆した気持ちを成仏できた気さえた。

次に印象的だったのは、ウェスト・ノーウッド・セメタリーだ。大英博物館からバスで1時間半ほどの郊外に位置する墓地で、ロンドンの7大墓地“Magnificent Seven”のうちの一つ。そこにカタコンベと呼ばれる地下墓地があると聞きつけて向かったのだが、お目当てのカタコンベや一部の建物は、保存のための工事中で中に入ることができなかった。前出のウェストミンスター寺院やロンドン塔、セント・ポール大聖堂など、その土地の一面がお墓として機能している建物は、どこも王族や功績が讃えられた人の特別なお墓だったため、いわゆる観光客向けではない墓地として見学できたのは、このウェスト・ノーウッド・セメタリーだけだった。日本でも、青山霊園などへは墓参り目的以外で訪れたことがあるけれど、何かのついでに立ち寄ったとかで、特別見学しようとして足を運んだことはなかったので、墓地の見学自体、新鮮に感じた。また、観光地ではないゆえに、説明書きの看板なども殆どなかったので、今回のロンドン滞在中で最も匂いや空気、音に敏感になった時間だった。ロンドンの中心部よりも時間の流れが遅いように感じられる園内でふと、「イギリスでは火葬のあと骨を拾うときに箸は使わないだろうな」と思った。自分にとっては当然のことも立場が変われば常識ではなくなるのだと、普段意識することもないので、ハッとさせられる思いつきだった。

ここでもう一つ思いついたことがある。それは、自分が旅のテーマとして葬送文化とジェンダー学という一貫性のない2つを選んだ理由についてだ。墓地でまばらに過ごす人たち（5、6人しか見かけなかったが、赤ちゃんがいたことをよく覚えている）を見ていて、この、自分と違う国で生まれ育ち、違う言語を使う人々が、一体何に悲しさを覚え、何をトラウマと感じ、何に気が滅入るのかを知りたかったのだと気づいた。例えば、この曇



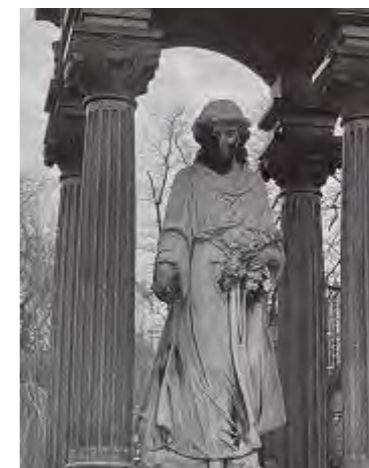
ウェストミンスター寺院の外観



ウェスト・ノーウッド・セメタリーの入口

天が続く天気には私と同じように気が滅入っているのだろうか？それとも慣れているのだろうか？など。何を悲しいと思うかに普遍性があることを確かめたかったのか、所変われば異なるということを知りたかったのかは分からないが、そうしたことを死と性というテーマから知ろうとしたのだと、ひとり納得した。納得したところで安易なテーマ立てだったとは思いつくし、普段の研究で自分自身が含まれている集団（たとえば日本の若者など）について考えることは良いとしても、自分が含まれていない集団について興味本位で知ろうとするのは、何か大きな問題を孕んでいる気がした。そして、レジャー目的ではないにしても、人が日常を送っているところに、何かを知ろう、学ぼうとして瞬間的に立ち入ることは、立ち入っていく本人にとってどこか気持ちが悪いものを感じられる時があるのだと思った。

結局のところ、自分は研究において当事者性のようなものに異様にこだわっているのだと再確認できたところで、日本に帰ってきた。「再確認」だから同じ結果をなぞっているだけだとしても、自分の外を見ているようで自分しか見えていなかったのだとしても、そう思い至るまでがとにかく特別な体験だった。存分にロンドンの匂いを嗅いで、そこから考え直したことで、今すぐに実を結ぶことはなくとも、たくさんの種を植えることができたことと確信している。



最も印象に残った石像



工事中だった
カタコンベの前の石像

ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ・セミナー： デジタル文化ユニット・セミナー

毛利嘉孝

今回の「IUEP Geidai 2023: Arts Mapping in London」では、単に一方的に情報を受け取る研修ではなく、日本で交わされている議論の一部を発表し、それをもとにロンドンの研究者やアーティスト、実践者たちと意見を交換することも一つの目的とした。そのために、Shared Campusであるロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ(CSM)とのワークショップとは別に、GAとかねてより共同研究を行っているロンドン大学ゴールドスミス・カレッジにおいてセミナーを3月9日(木)に開催した。

ゴールドスミス・カレッジ：YBAsと音楽、ファッション

ゴールドスミス・カレッジは、ロンドン芸術大学ではなくロンドン大学に属するカレッジで、ロンドン市南東部のニュークロスに位置している。学生数は約7000人、うち約5000人が学部生、約2000人が大学院生。創立は1891年でロンドン大学の中では比較的新しい大学となるが、アートと新しい人文学の領域では傑出した存在で、世界中から多くの留学生が学びにきている。GAからも毎年1、2名の学生が留学しており、現在もPhDとMAの課程にそれぞれ1名ずつ在籍中である。

ゴールドスミスは、美術の文脈では1990年代に世界中に影響を与えたYBAs(=Young British Artists)の代表的な存在であるダミアン・ハーストやジュリアン・オピー、サラ・ルーカスが学生として学び、拠点とした場所である。イギリスで最も権威のある現代美術の賞である「ターナー賞」の歴代受賞者のうち7人がゴールドスミスの出身で、とりわけ現代美術の領域での評価が高い。音楽では古くはジョン・ケイルやリントン・クウェシ・ジョンソンから、マルコム・マクラレン、ジェームス・ブレイク、ブリット・ポップのブラーまで実験的で個性的なミュージシャンを生み出したことで知られる。映画監督のスティーブ・マックイーンやファッション・デザイナーのマリー・クワントもゴールドスミス出身。南ロンドンという文化的多様性の高いロケーションもあって、政治的に過激で多文化主義的で多様なアーティスト、文化実践者を数多く輩出し、イギリスだけではなく世界を代表するアートスクールとして知られている。

その一方で、人文系の研究においても傑出しており、特にメディア&コミュニケーションをはじめアートマネジメント、キュレーション・スタディーズ、文化研究(カルチュラル・スタディーズ)の領域では一流の教授陣を揃え、QS World University Rankingsの世界ランキングでもトップ10に入る高い評価を得ている。

J-POPにおける拒否の政治学

今回の企画は、ゴールドスミスのメディア&コミュニケーション学部のデジタル・カルチャー・ユニット(Digital Culture Unit)のセミナーとして開催された。主宰は、同学部のマシュー・フラア教授。ソフトウェア・スタディーズの提唱者として知られ、MIT出版などから『メディア・エコロジー』や『ソフトウェア・スタディーズ』など多くの著作を発表している。東京芸術大学、GAとの関係も深く、「グローバル時代の芸術文化概論」のゲスト講師として招聘されたこともある。

研究会は、最初に毛利がPolitics of Refusal in J-Pop: Anonymity, Social Withdrawal, and the Paradox of Platform Capitalism「J-POPにおける拒否の政治学：匿名性、引きこもり、そしてプラットフォーム資本主義のパラドクス」と題した講演を1時間行い、その後会場に参加している研究者や学生と1時間議論するという形式で開催された。セミナーには、主宰のフラア教授のほか、『消費文化とポストモダニズム』や『ほつれゆく文化』、『自動車と移動の社会学』(いずれも邦訳あり)の著者で『Theory, Culture and Society (TCS)』の編集長であるマイク・フェザーストーンや『ソニック・ボディーズ』(未訳)などイギリスのサウンド・システム文化の研究者で映画監督でもあるジュリアン・エンリケス教授、文化産業、文化政策を批判的に

研究しているInstitute for Creative and Cultural Entrepreneurship (ICCE)の玉利知子上級講師など研究者、ゴールドスミス・カレッジの大学院生、アーティスト、そして今回のロンドン研修の藝大生たち合わせて30名ほどが聴衆、討議者として参加した。1週間ほどの短い告知期間だったにもかかわらず、会場のリチャード・ホガード・ビルディング(RHB)356教室はほぼ満席となり、熱い議論が交わされた。

後期資本主義と精神的な病

議論の内容は、メディアやコミュニケーション、情報や金融など非物質的な商品が中心的な存在となった現在の後期資本主義において、人々の文化や生活がどのように生み出されるのか、特に日本においてJ-POPと呼ばれるポピュラー音楽の表現にその資本主義の影響が生まれているのかを例に挙げたあと、文化と芸術、社会と資本主義の関係をあらためて問おうとしたものである。

特にゴールドスミスでも教鞭をとっていた音楽批評家で文化理論家だったマーク・フィッシャーの「資本主義リアリズム」、資本主義とうつ病の関係、「ゆっくりとキャンセルされている未来」、フランスの哲学者ジャック・デリダの影響を受けてフィッシャーが提唱した「憑在論(hauntology)」などをキー概念としながら、ボーカロイド以降の日本のポップスの生産や流通、消費と歌詞で扱われているテーマについて議論した。

ここで具体的な例として議論したのは、日本において若者に広がっているある種の「拒否の文化」である。たとえば、2021年に若者を中心に流行したAdoの〈うっせえわ〉という曲はそうした「拒否の文化」の典型的な例である。それは、上の世代に対する「拒否」であるだけでなく、上の世代から意味を与えられ上の世代が理解したつもりになることに対する「拒否」でもある。さらにいえば、それは「労働」や「結婚」、そして家族の「再生産」といった近代的な枠組みの「拒否」でもあるのだ。

マーク・フィッシャーも影響を受けていたイタリアの政治哲学者であり、アクティヴィストでもあるフランコ・“ビフォ”・ベラルディは、こうした若者たちの状況、特に「ひきこもり(Social Withdrawal)」を分析し、それが一般的に思われているような「社会的な病理」ではなく、むしろ現代社会の歪みに対する「健康な反応」であることを指摘している。こうしたフィッシャーやベラルディの議論の有効性とその限界を議論しようというのがセミナーの目的である。

今後の議論への期待

フラア教授やフェザーストーン教授、エンリケス教授、玉利先生をはじめ、会場で交わされた議論は多岐にわたりここで全てをまとめることは不可能である。むしろここで重要なのは、何らかの結論や合意形成がされたことではなく、藝大生とロンドン大学生、特に日本研究やポピュラー音楽研究、文化研究、そして現代美術研究をしている学生との間の意見交換が行われたことであり、それぞれの環境もっている状況の特異性や共通性、差異や類似性を理解し始めたことだろう。

セミナーが終了したあとも懇親会では議論が続き、特に研究をベースとした交流事業の可能性が広がった。このことは何よりも大きな成果だと考える。また現在ゴールドスミスやCSM、そして他のロンドン芸術大学に留学生として滞在している学生を一つのハブとしながら、一回限りではない議論が継続されることを期待したい。



ゴールドスミス、メインビルディング



セミナーの様子：マシュー・フラア教授と毛利嘉孝教授

21世紀の心理地理学： ロンドン・フィールド調査を通して大学の未来を考える

清水知子

2023年3月4日（土）から8日間、教員、学生10名と現地ロンドンに留学中の学生3名とで「世界展開力強化事業」の一環として、ロンドンでのフィールドワーク（IUEP Geidai 2023: Arts Mapping in London）を実施した。かつて1950年代にシチュアシオニストのギー・ドゥポールは、遊び心と「漂流」を軸にした都市調査を「心理地理学」と呼んだ。とくにイギリスでは、作家、建築史家のイアン・シンクレアがロンドンの文学と歴史をめぐる膨大な知識をもとにロンドン心理地理学地図を数々の作品に描き出したことで知られる。

IUEP Geidai 2023: Arts Mapping in Londonは、ロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ（CSM=Central Saint Martins）とのワークショップをはじめ、参加した学生がそれぞれ独自のテーマに基づいてロンドンの街を探索し、思いも寄らぬネットワークを築き、ロンドンへの認識を刷新する21世紀のロンドン心理地理学とも言える試みだった。

初日の5日（日）は、皆で共にカムデン・タウンのマーケット、ザブルドウィック・コレクション（Zabludowicz Collection）、ICAギャラリーを訪れた。産業革命の直中に石炭や製品を運ぶために造られたリージェント運河。その傍に並ぶ倉庫群が改装され、1974年以降、カムデン・タウンには様々な芸術家や工芸家のアトリエが出現する。70年代、カムデン・ハイストリートにあるライブハウスでは、ローリング・ストーンズやレッド・ツェッペリンといった伝説のロックバンドがステージに登場した。

今日、ロンドン屈指のマーケットと知られるカムデン・タウンは、60年代のクラシカルなモッズ・ファッション、パンク、ゴス、一点もののビンテージ品、ネパール製のカジュアルなハンドメイド衣料など、イギリスならではのサブカルチャーの歴史が息づく活気に満ちた場所である。2016年にはサディク・カーン市長がマーケットについての戦略的に議論するLondon Market Boardを組織し、「屋外都市空間の活用」の事例としても注目されている。

次に訪れたのは、イギリスを代表する美術収集家ザブルドウィック夫妻が創設したザブルドウィック・コレクションである。5日に開催されていたのは、上海を拠点に活動するマルチメディア・アーティスト、ルー・ヤン（陸揚）の個展「Neti Neti」だ。上海で生まれ育ち、幼い頃から日本のアニメ、SF、ゲームに没頭してきたルー・ヤンの展示は、テクノロジーを駆使した実験的な作品の斬新さのみならず、昨今の欧米においてどのように「アジア」が表象され、流通しうるかを知る上でも興味深いものだった。

その後、再び移動を重ね、1947年に詩人ハーバート・リードが画家リチャード・ハミルトンらと共に現代美術の自由な実験場として構想したICA（Institute of Contemporary Arts）へ向かった。そこで開催されていたのは、R.I.P. Germainの《Jesus Died For Us, We Will Die For Dudus!》である。タイトルの「Dudus」はジャマイカの麻薬の売人クリストファー・コークのニックネームである。Dudusは何トンものマリファナとコカインをアメリカに運んだ。彼を逮捕するために70人の命が犠牲になり、彼は23年の刑を言い渡された。けれども、アメリカに引き渡される際、多くのジャマイカ人がプラカードを持って街頭に立ち、当局より信頼できるDudusを支持したのだ。予測不可能な出来事といささか奇妙なブラックコメディが混合したこの作品は、QRコードをスキャンすると展覧会を「攻略」する便利な用語リストを手にすることができるというゲームのような設定もあいまって、思いのほか引きこまれた。その後、3月8日（水）はShared Campusであるロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズでワークショップを行い、9日（木）はロンドン大学ゴールドスミスカレッジにて開催された毛利嘉孝教授の講演会に参加し、ゴールドスミス・カレッジの研究者、院生と共に議論する機会を得た。

参加した学生は上記の初日とCSMの訪問日以外は、それぞれ各自で独自の研究テーマに就いてリサーチを進めた。私は、2022年夏にオープンしたイギリスで初となるLGBTQ+美術館クィア・ブリテン、パービカンセンターで開催されていたアメリカの肖像画家でありアクティ

ヴィストとして活躍したアリス・ニールの個展「Alice Neel: Hot Off The Griddle」、ヘイワード・ギャラリーの空間を一変させた話題の展覧会「Mike Nelson: Extinction Beckons」に足を運んだ。またワーナーブラザースによるハリポッターのスタジオツアーに参加し、映像制作のバックグラウンドについて知見を得た。そして10日（金）は、今年で13年目を迎えるWOW—Women of the World Festival（3月10日～12日開催）に参加した。インターセクショナルリティを軸に、フェミニズムに関する数々のシンポジウム、トークショー、パフォーマンス、ワークショップが開催されていた。大勢の人々が訪れる活気に満ちた空間に、ロンドンにおけるフェミニズムの展開と開かれた多様性を感じた。さらに帰国前日の11日（土）には、かつてシンポジウムでご一緒したロンドン大学ゴールドスミス・カレッジのマシュー・フラー教授らに昼食会にご招待いただき、毛利教授とともに現在のメディア研究、大学のあり方等について有益な議論を行うことができた。

「世界展開力事業」とは何か。文部省によれば、「国際的に活躍できるグローバル人材の育成と大学教育のグローバル展開力を強化する」ことだという。とはいえ、Times Higher Educationが発表する世界大学ランキングにおいて、日本は残念ながら下降の一途をたどっており、社会学者の吉見俊哉によれば、現在、日本の大学は「二度目の死」を迎えている。

実のところ、大学を変革することは、ポスト・ユニバーシティをめぐる議論とともに展開されるものかもしれない。だが、ここでのポストは必ずしも大学の「終焉」とそれ以後を意味するわけではない。この危機の時代に、かつての「大学」との関係はどう切り結び、現在の大学の内側からどのようにその仕組みを変えることができるのか。ポスト・ユニバーシティをめぐる議論は、こうした問いとともに従来の「大学」に代わるオルタナティブなネットワークを起動させ、個別具体的な状況のなかから、既存のシステムを脱却し、新たな知のネットワークを紡ぎ出していく試みとして捉えることができるのではないだろうか。

事実、参加した学生たちと過ごしつつ、少なくとも私には、今回のフィールドワークを通して、皆が日ごとにロンドンでの新たな出会いと発見を楽しみ、独創的なロンドンの心理地図を生成し、新たなネットワークを形成しているのが手に取るように伝わってきた。社会学者ミシェル・ド・セルトーにならって、「都市を歩く」ことを実践した8日間は、ロンドンの歩行者たる私たちが創意に満ちたレトリカルな歩行を繰り返すことで、いわゆる観光ツアーとはまったく異なる独自のロンドン地図を構想する日々だったように思う。この意味で、今回のIUEP Geidai 2023: Arts Mapping in Londonは、「世界展開力強化事業」がさらなる進展を遂げていく上で貴重な第一歩だったと言えよう。



ヘイワード・ギャラリー Mike Nelson: Extinction Beckons 展



カムデン・ロック・マーケット



WOW—Women of the World Festival に出店する Girls & Coffee & Fuck the Patriarchy のみなさん

Arts Mapping in London 2023 Photos



IUEP Geidai 2023: Arts Mapping in London

期 間：2023年3月4日（土）～13日（月）

場 所：英国ロンドン市内、ロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ校
ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ校

参加学生：李 静文 （大学院国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻博士後期課程）
金 秋雨 （大学院国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻博士後期課程）
宮坂遼太郎 （大学院国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻修士課程）
中島里佳 （大学院国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻修士課程）
長尾優希 （大学院国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻修士課程）
堀江 幹 （音楽学部音楽環境創造科）
尾上朝香 （音楽学部音楽環境創造科）
加藤夢生 （大学院国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻博士後期課程
／ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ校博士後期課程）
佐藤小百合 （大学院国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻修士課程
／ロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ校修士課程）
森下 響 （大学院国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻修士課程
／ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ校修士課程）
Shereen Perera （大学院国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻研究生）

参加教員：毛利嘉孝 （大学院国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻教授）
清水知子 （大学院国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻准教授）
中野 哲 （大学院国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻教育研究助手）

Paul Haywood （Dean of Academic Programmes, Central Saint Martins, University of the Arts London）
Fred Meller （Programme Director, Drama and Performance, Central Saint Martins, University of the Arts London）

Matthew Fuller （Professor, Department of Media and Communications, Goldsmiths College, University of London）
Mike Featherstone （Professor, Institute for Creative and Cultural Entrepreneurship, Goldsmiths College, University of London）

Tomoko Tamari （Senior Lecturer, Institute for Creative and Cultural Entrepreneurship, Goldsmiths College, University of London）

文部科学省 大学の世界展開力強化事業

「インド太平洋地域等との大学間交流形成支援 Shared Campus（国際共創キャンパス）を活用した日英豪印SDGs×ARTs グローバルリーダー養成プログラム—世界を幸福にするイノベーション創出—」（2022年—2026年）

プロジェクト・リーダー：今村有策（副学長〈国際連携担当〉、大学院美術研究科グローバルアートプラクティス専攻教授）

IUEP Geidai 2023: Arts Mapping in London

大学の世界展開力強化事業～インド太平洋地域等との大学間交流形成支援～
Shared Campus（国際共創キャンパス）を活用した日英豪印 SDGs×ARTs グローバルリーダー養成プログラム
——世界を幸福にするイノベーション創出

発行日：2023年3月31日

発行：東京藝術大学大学院 国際芸術創造研究科

東京都足立区千住 1-25-1

050-5525-2732

info-ga@ml.geidai.ac.jp

報告書編集：中野 哲

編集補助：堀江 幹、尾上朝香、清水知子、江上賢一郎、山崎 朋、古橋果林

デザイン：中島 浩

印刷：株式会社東京印書館